

# C-up ワールド

## 2002年11月号

### 2002年10月の山行記録

#### 講習山行

ルートファインディングを学ぶ会／

西上州・赤岩山赤岩尾根

10月5日～6日

#### 参加者

新井かよ子 (CU)・渡部吉実 (CU)  
横川秀樹・柳澤栄一・片岡和則・佐々木恵子・  
田口浩昭・山野昭人・山野美香・久野眞由美・  
辻谷宏人・木之下悟・日浅尚子・原真之・茨木嘉道・  
伊藤幸雄・宮崎将人 (本科)  
斎藤典子 (遠足)  
森幸洋 (シニア)  
工藤寿人 (講師) 松浦寿治 (講師)  
計21名

#### 天候・気温

10月5日：晴れ

10月6日：晴れ～曇り

#### コース・行程の概要

10月5日：

(伊藤一工藤隊：上落合橋→八丁峠→西丘→東丘→  
両神山→廃道経由で上落合橋)

(新井一松浦隊：上落合橋→廃道経由で両神山→東  
丘→西丘→八丁峠→上落合橋)

10月6日：小倉沢公民館→赤岩峠→赤岩山→赤岩  
尾根→八丁峠→上落合橋

#### コースの核心・講習のポイント

- ・踏み跡がない場所でのルートファインディング
- ・ガレ場、鎖場におけるスタンスとホールドの確保
- ・落石発生時の対処方法 (落石を視認してから回避行動に移ること)

#### 報告者のひとこと感想

1日目：

西武秩父駅から上落合橋までのアプローチが長いこと。ガソリンの残量を気にしながらのアプローチでした。上落合橋では、伊藤一工藤隊と新井一松浦隊の編成で両神山に向けて入山開始となりました。申し分のない快晴日であったため、心地よい汗をかきながら八丁峠までは快調なペースでの登頂となりました。八丁峠以降は鎖場の連続であり、両神山までの鎖場の数を数えるのも途中でやめてしまったほどであった。途中で新井一松浦隊とすれ違い両神山より廃道経由でベースキャンプに向かう。すでにベースキャンプでは、新井一松浦隊によってほぼテントが設営済みであった。遅れて申し訳ないと思いながら、夕食の準備に取り掛かるとあっという間に日が暮れ、ヘッドランプ、ランタンが灯る中での夕食 (大宴会?) となりました。

2日目：

約束の起床時間4:30より30分遅れての起床であった。BC撤収後に小倉沢公民館に移動しそこから赤岩峠を目指して入山を開始する。ほとんど誰も入山した形跡がなく、もうれつな藪の中を進んでいく。藪の中には棘をもっているものもあり、衣類に引っ掛けながら登頂を目指す。藪道を抜け、一息ついたところで、ハーネス、ヘルメットを装着し赤岩尾根へと進んでいく。今日のルートは昨日と異なり、鎖がなくまたガレ場ももろいため慎重にルートを踏んでいかなければならない。まさか、あんな岩場を登るわけないだろうな』と思っていた岩場を新井さんがリードで登っていく勇姿には、感動ものでありました。岩場通過後、ルートが分からず何回か引き返し再度ルートを検索しながら無事上落合橋に到着。ルートを偵察してルートを見極めることの大切さを認識した山行でした。

報告者 宮崎 将人



## 講習山行

### 沢登りを楽しむ会

#### 会津・中門沢

10月12日～14日

#### 参加者

幡鎌、新井夫妻、遠藤、渡部、柳澤

工藤・松浦（講師）

計7名

#### 天候・気温

1 2日快晴

1 3日快晴

1 4日曇りのち晴れ

#### 感想

10月11日（金）、8月の赤木沢以来、久しぶりの非日常の時間と空間に浸ることのできた中門沢は、小出の駅舎の庇を借りてのステーションビバークで始まった。時折通る車の音を耳に、浅くではあるが確実に眠りに落ちていくのは山塾2年目も半ばを過ぎた経験からだろうか。

10月12日（土）、ジャンボタクシーで袖沢林道に行く。検問所の担当者は登山者をも通さないと言う。仕方なしに駐車場から早々の藪漕ぎで検問をやり過ごし、テクテクと林道歩きが始まる。よく晴れた秋の柔らかな陽射しの中、時折通る工事車以外通るものとしてない道をいろいろな思考をめぐらせながらの林道歩きを私は嫌いではない。しかし5時間あまりもの重荷を背負っての単調な歩みに少々飽いてくる。

やっと入渓点に着き、身支度をして沢に足を踏み入れる。10月の沢である。冷気がはしり、緊張がたかまる。空は雲一つなく青く澄み渡り、水は透明ですべてを透き通し、水面下の石の一つ一つが存在を明らかにしている。兩岸の雑木はとところどころ色づき陽に輝いて、ほんのりとした温かさを伝えてくれる。そのパステルカラーの色調の持つ優しさに心は？十年前の乙女の感傷に浸っていく。沢は他に入渓する人もなく静かだ。手強い大きな滝もなくリードしてくれるMさんの後を快適に遡行する。しかし重荷を背負っての遡行に緊張は続く。金山沢の出会いを過

ぎるとちょっと気が楽になる。どうやら幕場のウグイ沢の出会いまで行けそうだ」と思っているうちに拍子抜けのする感じでウグイ沢の出会いに着いてしまった。

焚き火が燃え、林道歩きの途中土地の人から頂いたナラ筈でおでんの素を出し汁にしたきのこ汁、河原で一人黙々と野菜をきざんで作ってくれた心のこもったポトフに舌鼓を打ち幕営の沢ならではの幸せを満喫する。黒いシルエットとなった木々にかこまれた空間から見上げた夜空に星がまたたく…。明日を思い早目にシュラフにもぐり込む。

10月13日（日）、今日も快晴である。青一色に塗りこめられた空は雲一つない。青は青の世界、青の時代…等々と様々の場で多くの人に種々の感慨を抱かせる色である。今日は青い空を見上げ、感謝し青い空に包まれる幸せを感じる。奥深い沢の水は清らかに澄み、その透明な流れに朝の陽がふりそそぎ煌いている。小滝の水は真白い飛沫となり純白な美しさをひきたたせ流れ落ちる。確かな存在を誇示する石の色の変化を楽しみながら踏みしめる。木々の紅葉はまだ少し早くまばらであるが緑の中に混在する朱、黄、茶…は温かくゆったりと優しく目に語りかけ、朽ちた倒木になめこが自生する。今日はなめこ汁にありつこうと倒木があると目はなめこを探している。快適な遡行が続く。源流が近くなると沢中はだんだんと狭まり水流も優しく、岩、石、その間を流れる水の変化、小滝、兩岸の木々の風情…など沢山の自然の佇まいが一斉に視野の中に入りこんでくる。私は非日常の時間と空間に埋没し酔いしれ、この幸せを懼れもする。

ザイルが出るような滝もなく快調な遡行が続いたせいか源頭近くなると疲れがでてきた。2mほどの小滝を登り損ねると「給水のための休憩」と言って休憩がはいる。これより先は水もあまり望めなくなるからとここでなめこ汁を作ることとなる。リーダーの絶妙な配慮なのだ！くだんのなめここと生味噌、おでんの素でなめこ汁がつくられる。至福！」の一言である。たっぷり休憩をとったため活力がもどる。ザックの中の2kg強の水の重さを実感しながら源頭をつめて行く。水の流れがなくなると沢は静寂こつつまれ、私達の作り出す音以外、今日は風もなく木々のさざめく音もなく静謐のなかにいる。「よいよ突入か！」と後ろからKさんの声がかかる。熊笹をかき分け押さえつけ、灌木を踏み越える。前をリード

するMさんの背中が大きく見える。無心である。ただひたすら前に進むことに専念する。藪漕ぎは恐怖ではあるが嫌いではない。無心になれる時が好きだ！ぽっかりと小さく開けた草原に飛び出す。抜けきったわけではないがもう中門岳が近いことを誰もが知っている。笑顔が明るい。MさんとKさんの偵察の結果、今日のテント場はここに決まる。

濡れたものを日に当てて乾かし、青く澄み切った空を真上に眺め、風もなくふりそそぐ陽光を浴びて午睡を楽しむという贅沢な時間を過ごす。それぞれの夕食を作り、ここまで運び上げた（私ではないが）お酒を飲み、談笑する。心尽くしのおでんが事のほか美味しい。寒くなりガスって視界が悪くなったのでテントに引きこもると居残って盛り上がっていたKさんからしきりにコールがかかる。着こんで再び出て行くと霧が晴れていた。眼前にほんのり薄墨をちらした白い雲海が広がり、その上に茜色の雲が細くたなびき、遠くシルエットとなった燧ヶ岳の双子峰がくっきりと浮かび上がり目に焼き付いてくる。枕草子の「春は曙の段」が頭を過ぎる。秋、夕暮れの山の頂きから見下ろしている私とではシチュエーションが異なるが悠久の時間と空間をこえた自然の佇まいに感慨を深くする。世代の違う同行者とのふれあいは気遣ってか東京音頭や炭坑節…まで飛び出す。満天の星空を見上げ語り合う温かいふれ合いも2000mの山頂の冷気には適わなくなりテントに入りこむ。草原の上のねぐらの床はふかふかの絨毯であった。

10月14日（月）、曇り空、遠くの視界は悪く、少し寒い。朝露に濡れるのを嫌って合羽を着たまま歩き出す。少しの藪漕ぎで中門岳に出る。黄土色の草紅葉のなかに点在する池塘は曇天のなかにあって寂しく、しっとりとした秋色をかもし出す。中門岳を足早に一回りして会津駒ヶ岳・駒の小屋を経て檜枝岐への登山道を下る。下るにつれて登って来る大勢の登山者と行き交う。だんだんと雲は退き青空が広がり浅く色づいた楓が「もっと艶やかな時にまたお出で！」とささやく。徐々に感性は日常の時間と空間に引き戻されて行き、今回の山行も終わりに近づく。山旅もまた一期一会であるのだろう。同じシチュエーションで登れることはなく、一つ一つの山行を大事に楽しく登りたいと思いつつ充足感に満たされて下山する。

今回の山行報告は書くつもりは毛頭なかったため、

山行記録的なことは何も書けませんでした。山行の雰囲気至少在りでもお伝えできれば良いと思います。

報告者 遠藤 末美



## 自主山行 鳳凰三山テント縦走 10月12日～14日

### 参加者

福田洋子・浅子裕子・田口浩昭・  
山野昭人・山野美香

### 天候

快晴

### 工程

- 一日目：夜叉神峠登山口～夜叉神峠～杖立峠～  
苺平～南御室小屋（泊）
- 二日目：南御室小屋～薬師ヶ岳～観音ヶ岳～  
地藏ヶ岳～高嶺～白鳳峠～広河原峠～  
早川尾根小屋（泊）
- 三日目：早川尾根小屋～アサヨ峰～仙水峠～  
北沢長衛小屋～北沢峠

### 山行のポイント

テントを担いでの縦走  
荷物の軽量化  
現在地の確認  
工程の記録

### 感想

一日目。夜叉神登山口から南御室小屋まで、樹林帯のダラダラ登りでみんな疲れていた様子。テント場15:30到着。すでにテントがいっぱい！どうにかふわふわの良い場所を見つけた。最高だ～。  
二日目。行動時間も長く、岩場も少し有るのでゆっくりペースで登ることに。途中で岩登りをして、気分転換。テント場に予定より早く到着。まだ空いている。ところが、そのあとすぐにいっぱい（良か

った早く着いて)。

三日目。5:45出発。アサヨ峰でみんなで小さい岩登りをして、ハイポーズ(写真撮影です)。北沢長衛小屋がリフォームされていて綺麗でした。三日間天候が良く贅沢な程の展望でした。

報告者: 田口浩昭

△△△△△△△△△△△△△△

## 自主山行

### 人工壁レーニング(雨のため、日和田から変更)

10日26日

#### 参加者

田口浩昭・山野昭人・横川秀樹 以上3人

#### 自主のポイント

リード技術の確認、ビレー時の注意点を確認  
そして、ひたすら登りこむ

#### 感想

日和田自主を明日に控えた10月25日金曜日の夕方、勤務中にもかかわらずyahooで天気予報をチェックすると、埼玉秩父地方の降水確率は70%を超えている。これは駄目だと即観念し、Yご主人とT氏に「明日はストーンマジックに変更。横浜線・淵野辺駅に9時45分集合」とメールで連絡。

そのあと私は、時計の針が午後6時を指す前に、同僚の目をやや気にしながら、そそくさと席を立ち、神保町のさかいやスポーツ、パタゴニア&ROCK館へと向かう。目的の品は、ROCAの10.5mm×30mの室内用クライミングロープ。古いロットのものが残っていれば7000円のはずだったが、残念ながらそれは完売とのことで、お値段は9000円也。これを買うくらいなら前日に池袋のコージツで見かけたBEALの「ウォールマスター」のほうが安いと思っただが、さすがにこれから池袋へ向かう元気はない。仕方なく購入に踏み切り、その晩はロープを抱いてベッドに入った。

当日は朝から雨。予定通り、午前9時45分、淵野辺駅の改札口に男3人が集まった。当初、今回の

自主トレはYご主人の奥方やF女史、それに日和田の住人I氏も参加のはずだったが、アレやコレやで一人抜け、二人抜け、結局、私を含めてムサくるしい男3人だけが残ってしまって、どうも明るさが無い。やや重苦しい雰囲気です。駅から10分のストーンマジックへと向かう。前夜にストマジへ電話したとき、明日は団体で予約が入っていますし雨ですから朝イチは混雑しますよ」と脅されていたが、その言葉どおり受付には行列ができていた。さらにはイエティ(遠藤晴行事務所)の講師陣とスクール生も大挙して押し寄せてきた。聞けば、湯河原幕岩の講習の予定だったが雨のためストマジに変更したとのこと。団体予約とは彼らのことだったようだ。

さて、ストーンマジックに初めて来た我々3人、会員登録料はモンベルカードやICI石井スポーツ、yoshikiスポーツのカードがあればタダという情報を事前に入手していたため、ここで一人1000円の節約に成功。さらに3人だと団体割引で15%引きとなり、使用料2000円が1700円で済んで思わず上機嫌となる。(5人以上は2割引)

着替え後、まず向かったのは空いているリード面。ナンチャクのクリップのやり方を確認して、おろし立てのROCAのロープで3つ目のプロテクションを取る所まで交代で登り、ビレー方法もお互いに確認しつつウォームアップとする。確保器はルベルソを使用。このウォームアップではT氏が見事にZクリップという悪いお手本を示してくれて、Yご主人と私は思わず爆笑。T氏はこの経験をしたことで2度とZクリップはしないと固く誓った(ようだ)。

さて、リードに慣れていない我々のクリップ技術はというと、かなりぎこちなく、地上でもう一度練習を繰り返す。ゲートが右向きの場合、左向きの場合を、それぞれ右手と左手でスムーズに出来るようにしつこく反復練習。それが飽きたところで、今度は別の前傾壁を使い、リードで登った後わざと墜落してみることにする。プロテクションを4つ目まで取り、まず高さ6mの地点まで登る。トップロープで落ちたことはあっても、リードで落ちた経験のない3人がビビりつつも代わる代わる「エイヤッ」と飛び降りる。3人とも墜落距離は2~3m。ロープの伸びとたるみの分で予想した以上に落ちることを確認したのは収穫だ。また、墜落の衝撃だが、これはほとんど感じない。伸びとたるみ、それに4つのプロテクションによる摩擦が吸収してくれるせいか、

「ひゅーッ、ヒタッ」という感じで気持ちよく止まってくれた。ビレイヤーも壁からそれほど離れなかったため、壁に激突するようなこともなく、無理なく止めることができた。

そのあとは、トップロープで5.8～5.10cまでの面に交代で挑戦。ストマジには普通の人工壁と同様、ホールドを取り付けた壁もあれば、自然の岩場を模したタワーもあり、なかなか面白い。確保器は、トップロープにペツル社のグリグリが既にセットされており、スポーツクライミングではグリグリが標準となりつつある感を強くしたが、これは機能は別にして、225gという重量と9000円という値段ははやや不満の残る道具である。また、ビレイヤーがいなくても一人で登れるというオートビレイの機械が何台もあり、これはとても便利だった。

さて、腕がパンプしかけたところで、今度はマルチピッチができるアルパインタワーに移動。このタワーは中間部に小さなテラスがあり支点も取れるようになっている。そこで、リードクライミング～セカンドのビレーというマルチピッチの一連の流れを復習する。狭いテラスでのロープワークはやりにくかったが、「ビレイ解除」 「ロープ引いて」 「登っていいよ」などの呼び掛けの合図についても確認した。

(余談だが「生と死の分岐点」には呼び掛けは二つで充分との記述がある)

また、このアルパインタワーの反対側の面には、岳嶺岩の大ハンクを思わせるようなといふとかなり大袈裟だが、それなりのハンクがあって人工登攀の練習ができるようになっている。念のためと思っで持参したアブミ2個が役に立ち、まずはトライしてみることにする。1回目では、Yご主人しか登れず私とT氏はあえなく敗退。しかし、なんとか2回目以降で二人とも上まで辿り着くことができた。

このあと、疲れた体にムチ打って、ボルダリングと再びトップロープにも励み、気が付いたら時計の針は午後5時を回っている。朝10時から7時間のトレーニングは盛り沢山の内容で集中してできたため、時間の経過はあっという間だ。T氏は快い疲労感で満足げの様子。Yご主人と私はといえば、翌日の東吾野の岩場講習に備え、パンプした腕をさすりながら「ちょっとやりすぎたかなあ」と反省しつつ帰路についた。

10月は、気候は涼しく岩練習に熱が入り、澄み渡った青空と紅葉でテント縦走も「最高だ！」っていう感じが山行記録から伝わってきます。沢も沢登りというより山に親しむ沢旅の風情が強くなってゆくのですね。私は年にとって感性が鈍くなっている感もあります。若いころはもっと山や自然に感動を覚えていたはずですが、純粋に山の自然に同化するような感覚が羨ましく感じられます。山行記録ありがとうございました。

今後みなさまのご協力をよろしくお願いいたします。

## アドレス

無名山塾 <http://www.sanjc.com>  
 山塾サポート [RXL13656@nifty.ne.jp](mailto:RXL13656@nifty.ne.jp)  
 Phone 03-3941-3481  
 Fax 03-3941-3482

## iモード

<http://member.nifty.ne.jp./c-up/i.htm>